2011.5.19

小説目録に見る『繡像小説』の刊行年月日

樽 本 照 雄

『繡像小説』の刊年について、中国の研究者が記述を誤るのはなぜだろうか。

現在では影印本で簡単に見ることができる。原物あるいは影印本を見ているはずなのだが、小説目録を作成するときに必ずといっていいほど誤記する。

まことに簡単なことなのだ。

『繡像小説』は、創刊号から第12期までは刊行年月日を表示していた。半月刊を守っていたらしい。しかし、第13期よりその年月日を印刷しなくなった。終刊となった第72期までその状態がつづく。

私がいっているのは、該誌第13期からは「刊年不記」とするのが適当であるということ。推測して半月刊の月日を示すにしても、それが推測だとわかるように記述する。ただ、それだけ。

私は『清末民初小説目録』第３版で、カッコを使用して区別した。利用する研究者の多くは、そんなことには知らん顔だ。あまりにも間違いが多い。第４版では、推定月日を明示したうえでわざわざ「……とするは誤り」と説明した。まあ、日本語を知らなければ理解できないかもしれないが。

劉永文『晩清小説目録』（上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2008.11）に収録された『繡像小説』の刊行年月日が不正確である。これについては、書評*1で指摘した。私は、機会があるたびに注意を促している。だが、まったく研究者の役には立っていないらしい。

その劉永文目録について詳細に点検をしたのが王鑫「《晩清小説目録》指瑕」（『明清小説研究』2010年第4期）だ。清末小説研究会ウェブサイトの2011年２月４日付で簡単に紹介した。ご覧くださった方もいるだろう。

王の点検は、かなり細かいところまでおよんでいる。劉目録が記載した発行年の間違いをまとめているところからもその厳密さがわかる。

ところが、『繡像小説』の刊行年月日に関しては、誤りがあることを王は指摘していない。検査の対象から全体が抜け落ちている。

くりかえすが、『繡像小説』第13期より刊行年月を記載しなくなったのは周知の事実だ。どうやら、周知のことだと思っているのは私ひとりだけらしい。

王は劉目録を点検するにあたって実物を見ている。そうでなければ、作品名、著者名などの誤記を明らかにすることはできない。その彼が、『繡像小説』についてだけ刊行年月の間違いには気づかなかったのだろうか。厳密に資料をあつかうのが王のやり方だと理解したのだ。しかし、その箇所に限ってはそうではない。

『繡像小説』の刊行年月日つながりで陳清茹『光緒二十九年（1903）小説研究』（鄭州・中州古籍出版社2009.9）をご紹介する。

1903年の小説に限定して論じ、特徴がある。私が注目するのは、該書の附録として作られた小説目録だ。陳清茹は、新聞雑誌掲載の小説、単行本小説および伝統小説の３部に分けて編集した。

この陳目録には『繡像小説』掲載の小説を収録している。問題は、こちらに記載された刊行年月が大きくはずれていることだ。どこから出てきた数字なのか、最初は理解できなかった。

説明をするために「老残遊記」の初出を樽目録から抜き出す。

「老残遊記」巻1-13、『繡像小説』9-18期　癸卯8.1-刊年不記［癸卯12.15］(1903.9.21-［1904.1.31］とするは誤り）である。『清末民初小説目録』第４版では、そのように記載した。

見方から説明しよう。

該作品は、『繡像小説』第９期（癸卯八月初一日）から連載がはじまった。刊年の旧暦を新暦に変換すると、それは1903年９月21日にあたる。途中で原稿没書事件があり（目録には記さない）、連載は巻13（実際は原稿巻14）で中断する。第18期のことだった。該誌第18期には、刊行年月日が記載されていない。ゆえに「刊年不記」と表記する。うしろの［癸卯12.15］は、かりに半月刊が守られていたとすれば旧暦十二月十五日、すなわち［1904.1.31］になるだろうという意味だ。半月刊が維持された証拠は存在しない。「……とするは誤り」とわざわざ注記した理由だ。

その部分を陳清茹は、どう記載したか。つぎに引用する。

29.《老残遊記》，10回，未完，作者劉鶚，載《繡像小説》第9-18期，光緒二十九年八月初一（1903年９月21日）至十二月二十九（1904年２月14日）216頁

該誌第９期に刊年があるのはその通りだ。そこが問題ではない。

間違っている箇所は、10回もそうだが、ここでは「至十二月二十九（1904年２月14日）」に注目する。

ひとつは、『繡像小説』第18期には印刷されていない刊行年を記していること。

ふたつは、「十二月二十九」とはなにだろうか。

半月刊で雑誌が発行されたとすれば、刊年を表示した部分を参考にして、旧暦で初一日と十五日のはずだ。刊年が記載されていないから予測をすることにしようか。十二月の初一日か十五日のふたつしかない。そのどちらでもなく「二十九」というのだから奇妙だ。陳清茹が自分で考え出したとも思えない。何か根拠があるのではないか。そうでなければ、中途半端な「二十九」を書くことはできないだろう。

陳が附録を作成するにあたり参考にしたのは、以下の書籍だという。

陳大康『中国近代小説編年』、尊(ママ)本肇(ママ)雄『新編増補清末民初小説目録』（中国語音にもとづいて名前を書き誤ったと見える）、陳鳴樹主編『二十世紀中国文学大典』、王継権、夏生元編『中国近代小説目録』、欧陽健、蕭相愷主編『中国通俗小説総目提要』などなど。

陳清茹が拠ったのは、それらのうちの１種類にしぼることができた。陳大康『中国近代小説編年』（上海・華東師範大学出版社2002.12）である。

陳大康の該書から関連箇所を引用する。

（光緒二十九年十二月）二十九日（２月14日）《新民叢報》第四十六号開始連載《学海潮伝奇》，至次年五月十五日第四十九号畢，作者署“春夢生”。

《繡像小説》第十八期連載《老残遊記》，至本期止，未完。（（光緒二十九年十二月）は樽本が補った）111頁

ここを示せば、どこが誤りなのか、と反論される可能性がある。陳清茹はそういいそうだ。上とのつながりを見ると、『繡像小説』第18期の刊年はどうしても

「十二月）二十九日（２月14日）」になる。陳大康は、そうはっきりと書いているではないか。だから陳清茹はそのように注記した。

だが、これが間違いなのだ。

誤りは、陳大康と陳清茹のふたりともが犯している。

『繡像小説』第18期には刊行年月日の表示がない。これが、基本事項である。刊年がないところに無理矢理月日をつけようとするから間違える。

まず陳清茹の誤りから説明する。

上に引用した陳大康の記述は「老残遊記」の行とその上の行には断絶がある。「十二月二十九日（２月14日）」は、その行の範囲内でのみ有効なのだ。つまり、『新民叢報』第46号は、たしかに「十二月二十九日（２月14日）」が刊行年となる。しかし、それと「老残遊記」は、なんの関係もない。陳清茹は、その事実に気づかなかった。

陳大康の年表は、つぎの編集方針のもとに編まれた。

大きくは、作品の刊行は旧暦だからその順に配列する。

ここに落とし穴がある。新暦で表わすにしても、月日のうちの日が明確でなければ換算できない。陳大康は、どうしたか。月しかわからない刊行物は、その旧暦月の後方にまとめた。年だけのばあいは、「月份不詳」の件として旧暦年の後方に配置する。

以上の編集方針を理解すれば、上に引用した『繡像小説』第18期の直前で線引きされていることがわかる。

すなわち、陳清茹は、陳大康の年表を読み間違えた。

陳大康の誤りのひとつは、まぎらわしい記述をしたことだ。あるいは説明不足か。陳清茹が誤読をしたのがその証拠となる。「同月」と別に示せば誤解を避けることができたかもしれない。結局のところそれは読み手の責任であって、陳大康を責めるのは酷であるというならば、それでもよい。だが、どのみち「十二月」には配置すべきではなかった。陳大康もやはり推測でしかない半月刊の月をうのみにした。

『繡像小説』刊年の誤解は、さかのぼると主として阿英の説明に行きつく。「始刊於光緒癸卯（一九〇三）年五月，至丙午（一九〇六），因伯元逝世休刊，共七十二期」（阿英『晩清文藝報刊述略』上海・古典文学出版社1958.3。17頁）。李伯元の死去と雑誌停刊を結びつけたのが阿英だった。それが間違いのもとだ。

それから半世紀以上も経過した。だが、中国の研究者はいまだに阿英の説明に呪

縛されたままだといわざるをえない。自分で雑誌を見たとしても、そこに刊行年月日がないことを記す気にはなれないらしい。自分の眼が信頼できずに、存在していない月日を見るのだ。これを呪縛といわずしてなんという。 ㊣

【注】

１）「清末小説目録の最新成果――劉永文編『晩清小説目録』について」『東方』2009年5月号2009.5.5。のち『清末民初小説目録』第４版に収録

（たるもと　てるお）